

支援する側・受ける側の思いやり②

家族の形が多様化し、家族以外がケアの担い手となる中で、支援する側はケアの専門家に固定され、支援する側と支援を受ける側が分断されてしまいがちです。そこではどうしても、お互いの気持ちに寄り添いあうことが難しくなることでしょう。そんな中でも、支援する側と受ける側、それぞれの思いやりの場面に遭遇することがあります。



物忘れが目立つようになってきた 90 歳男性 S さんは、足を悪くして老人ホームからなかなか外出できなくなり、老人ホームに入居しているにもかかわらず孤独感を強めているようでした。妻には先立たれ子供もいない S さんは、もともと寡黙で他の入居者と親しくコミュニケーションを取るタイプではありません。最近、老人ホームのスタッフに声を荒げてしまうことも多く、スタッフも S さんに対してどこか怖がって遠慮がちに接してしまうようです。

前日に、老人ホームのフロントでイライラして怒鳴ってしまった S さんについて老人ホームから報告の連絡があったので、S さんにお会いしに行きました。前日に何が原因で怒鳴ってしまったのか、また怒鳴ってしまったことそのものも忘れていたようでしたが、どこかイライラして過敏になっている様子はいかがえしました。

そこで、今の S さんには、気分を変えること、楽しい気持ちの記憶に上書きすることが必要だと考えました。S さんにとって楽しい記憶とは何でしょう。もう 5 年以上のお付き合いになる私は、S さんがコロナの流行前には週 3～4 日は通っているとおっしゃっていた蕎麦屋の話を思い出しました。S さんは、蕎麦屋に通っていたことは覚えていましたが、その場所については思い出せない。しかし私が S さんから以前聞いていましたから、問題なくたどり着くことができました。

その蕎麦屋の店構えを見て、S さんはご自分がたびたび通っていた場所であることを思い出したようです。5 年ぶりの来店でしたが、何とたまたまその日のシフトに入っていた店員さんが、S さんのことを覚えていてくださいました。さらに驚いたのは、S さんは「いつも頼んでいたもの」も思い出せずにいたところ、その馴染みの店員さんが「いつものとろろのせいろですね、サービスで葱を多めで！」と、気を利かせてくれたのです。S さんと私の様子を見た上での、格別な思いやりです。

「そうなんだよ、俺にだけ葱をこっそり多くしてくれるんだよ」と、S さんは記憶の糸が繋がってきたご様子。S さんにとって、とても嬉しい気持ちの残る時間となりました。

ご本人の尊厳をまもるための意思決定支援をする上で、元気なときに伺っていたお話しが、今になってこうやって役立っています。将来的に支援をする側と受ける側になるとしても、まだ元気なうちからお互いの信頼関係を構築しておくことが大切です。

つづく